

第96回定期演奏会

PROGRAM

ロドリゴ: アランフェス協奏曲 (約23分) ★

Joaquín Rodrigo: Concierto de Aranjuez

第1楽章 アレグロ・コン・スピリート *Allegro con spirito*第2楽章 アダージョ *Adagio*第3楽章 アレグロ・ジェンティーレ *Allegro gentile*— 休憩 (20分) — *Intermission*

ブルックナー: 交響曲 第6番 イ長調【ハース版】(約55分)

Anton Bruckner: Symphony No. 6 in A major

第1楽章 マイエストーソ *Majestoso*第2楽章 アダージョ: きわめて荘厳に *Adagio: Sehr feierlich*第3楽章 スケルツォ: 速くなく - トリオ: ゆっくりと *Scherzo: Nicht schnell - Trio: Langsam*第4楽章 フィナーレ: 躍動的に、しかし速すぎず - アレグロ *Finale: Bewegt, doch nicht zu schnell*指揮: 下野 竜也 *Tatsuya Shimono, Conductor*ハープ: 吉野 直子 *Naoko Yoshino, Harp* (★演奏曲)管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

2017 5/26(金)・27(土)・28(日) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論家)

南国の哀愁、北国の威容

今日の演奏会のプログラムでは、第1部と第2部が、全く正反対の雰囲気をもつ作品で構成されていることが面白いだろう。第1部での「アランフェス協奏曲」は、スペインの由緒ある王宮や庭園に託し、旧き良きスペイン宮廷への追想を描いた名曲である。特にその第2楽章は有名で、曲名を知らない聴き手でも、このメロディはどこかで聴いたことがある—と思いつくはずに違いない。しかも今回は、原曲の「ギター協奏曲」でなく、「ハープ協奏曲版」で演奏されるという貴重な機会だ。

これに対し、第2部で演奏されるブルックナーの「交響曲第6番」は、厚みのあるオーケストラがごうごうと鳴りわたる、堂々たる大伽藍^{がらん}を思わせる作品だ。「長いのがどうもね」と言われるブルックナーの交響曲の中では、初期の交響曲と同様、比較的短い方に属するのだが、それでも1時間近くかかる(但し1時間を超えることはないのご安心を)。しかし、いい演奏で聴けば、決して長さは感じないはず。



ライターおすすめ

必聴POINT

ロドリゴ: アランフェス協奏曲

スペイン国民楽派の香りをハープ版で

圧巻は第2楽章。イングリッシュ・ホルンが吹きはじめる主題は哀愁にあふれ、心に迫る。この楽章あるがゆえに、「アランフェス協奏曲」は、古今のギター協奏曲(原曲)の中でも最も人気を得る存在となった。一度聴いたら忘れられない名旋律。

ブルックナー: 交響曲第6番 イ長調

第1楽章の第1主題は、ある映画音楽にそっくり?

アルプス的な巨大な威容を誇る彼の交響曲の中では、第1楽章第1主題をはじめ、珍しく人間的で親しみやすい曲想が多いのがこの「6番」。しかし、どっしりとした重厚さと、大咆哮する金管楽器の迫力は、いつもながらのもの。意外に聴きやすい交響曲では?

第96回定期演奏会

PROGRAM NOTE



[曲目解説]演奏をより深く楽しむために — 東条 碩夫(音楽評論家)

ロドリゴ: アランフェス協奏曲

初演(原曲・ギター協奏曲版): 1940年11月9日 バルセロナ

優雅華麗なハープと、色彩的な管弦楽との対話

「アランフェス」とは、スペインの首都マドリッドから南へ50キロほど離れた街の名である。16~18世紀に建立された王宮を中心に、森、河、泉、庭園などがある美しい場所だ。ロドリゴは、18世紀スペインの宮廷を想定、その空想上の世界の思い出や郷愁を描こうとした、と語っている。

原曲は周知のように「ギターと管弦楽のための協奏曲」で、ロドリゴはこれを1939年にマドリッドで完成した。そしてこの曲は、同年に名手アンドレス・セゴビアにより初演されたカステルヌオヴォ・テデスコの「作品99」の協奏曲とともに、その後のギター協奏曲ブームの幕開け的存在となったのだった。

ギターの演奏に詳しくなかったロドリゴは、作曲に関しては、マドリッド音楽院ギター科教授サインス・デ・ラ・マーサ(1896~1981)に助言を求め、翌年の初演も、彼に任せた。ちなみにこのデ・ラ・マーサは、日本でもよく知られていた人で、ギター界では「デラマサ」という愛称で親しまれていたようである。60年代後半に来日した際には筆者のインタビューに応え、「ロド

リーゴは、ギターのことを、なんにも知らなかった。だから、わしが何から何まで教えてやったのだ」と、得意満面、語っていたのを思い出す。

ただしロドリゴは、その他にも「ある貴紳のための幻想曲」など、ギターとオーケストラのための協奏曲をいくつか書いている。それらは、「ギターが不得意」という作曲家のものにしては、この楽器の魅力を最大限に発揮させた曲ばかりで、活気に満ちて楽しく、美しい。

今回の「アランフェス協奏曲」は、そのギターのパートをハープに置き換えて演奏されるが、ギターの民族的な香りが、ハープの洗練された音色になると、曲の感じも少し変わって聞こえるだろう。原曲をご存じの方には、いっそう興味深いのではないか。なおロドリゴは、1952年になってから「コンチェルト・セレナータ」という美しい「ハープ協奏曲」も作曲しているので、この楽器についてもある程度詳しくはなかったのではないと思われる。

曲は3つの楽章からなるが、特に第2楽章が有名で、その夢のように美しい主題は、聴き手を哀愁と郷愁の深い情感の中に引き込まずにはおかない。

楽器編成

独奏ハープ、フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、弦楽5部



[作曲家プロフィール]

ホアキン・ロドリゴ (1901 - 1999)

Joaquín Rodrigo



スペインはバレンシア州、海沿いの街サグントに生まれた。3歳の時に視力を失ったが、音楽教育を受け、作曲家として大成する。パリに留学、スペイン内戦(1936年7月~1939年4月)の期間はパリとドイツに住んでいたが、39年にはマドリッドに戻った。スペインの民族的な雰囲気にあふれた美しい作品を数多く書き、スペイン国民楽派の有名作曲家として、同国政府やフランス、欧州文化協会などからさまざまな勲章を受け、敬愛された。

PROGRAM NOTE

ブルックナー：交響曲 第6番 イ長調

初演 第2楽章と第3楽章：1883年2月11日 ウィーン
 全曲(部分カットによる)：1899年2月26日 ウィーン(マーラーの指揮)
 完全全曲：1901年3月14日 シュトゥットガルト

彼の交響曲の中では珍しくリズムカルな曲想

ブルックナーの番号付交響曲は9曲を数えるが、この「第6番」は、その中でも異色の存在であろう。

たとえば第1楽章には、彼のトレードマークになっている、息の長い、重厚壮大な主題がない。むしろリズム感のある、躍動感のある主題が中心になっている。といて、他の曲の作曲時期との間に長い時間的な空白があるかという、そうでもないのだ。彼はあの豪壮な威容にあふれた「5番」を1878年に最終完成すると、翌79年9月24日からこの「6番」を書きはじめた。そして81年9月3日に完成させると、その同じ年のうちにはもう、叙情的な息の長い旋律主題を第1楽章に持つ「7番」を書きはじめたのである。ブルックナーは交響曲をどれも似たようなテで書いている、などという人は、このあたりをじっくりと聴き比べてみれば、認識を新たにすることに違いない。

相違点はまだある。「第1番」以降の交響曲において、ブルックナーの生前中に全曲が演奏されなかったのは、未完成に終わった「9番」を別とすれば、この「6番」のみである。そして、ブルックナー自身が大きな改訂を加えず、かつ彼の弟子たちがあれこれ改ざんの手を加えなかった交響曲は、この「6番」のみである。いわば無傷のままだった「第6交響曲」だが、それは逆に弟子たちからも注目されなかった作品ということにもなるのか。

そしてまた不思議にも、この曲についてのエピソードは、ほとんどない。生涯の大半をリンツとウィーンで送り、あまり劇的な出来事のなかったブルックナーでも、ふつうは作曲に関連して、



[作曲家プロフィール]

アントン・ブルックナー (1824 - 1896)

Anton Bruckner

作品への発想とか、作曲時期における出来事とかの話題がついて回るものなのだが……。

つまりこれは、いろいろな意味で、ブルックナーの交響曲の中では、あまり目立たない存在なのである。演奏の機会も、彼の「3番」以降の交響曲の中では、おそらくいちばん少ないであろう。だからと言って、この「第6番」がつまらない交響曲かということ、それはまったく違う。論より証拠、聴いてみればよい。

第1楽章での第1主題のリズム性は際立っている。ヴァイオリン群の細かいリズムの下に、チェロとコントラバスが奏しはじめる第1主題が、とつぜん全管弦楽に爆発し、轟きはじめるあたりは如何にもこの作曲家らしくて微笑ましい。——この主題は、旋律の逆行はあるにしても、あの映画「アラビアのロレンス」のメイン・テーマ(モーリス・ジャール)と、映画「野性のエルザ」のメイン・テーマ(ジョン・バリー)とそっくりではないか? 第1楽章の終結部では、この主題が転調に転調を重ねて繰り返されつつ(ここが魅力だ)、全管弦楽の豪快な咆哮のうちに結ばれる。

第2楽章は落ち着いた翳りのある第1主題と、やや明るい第2主題(これは美しい)と、再び暗い第3主題とで織り成される。ブルックナーの遅いテンポの楽章は、どれも傑作である。

第3楽章は躍動的な「スケルツォ(諧謔的に)」」。中間部(トリオ)は農民舞曲風の穏やかな曲想だ。

第4楽章は、「第7番」のそれにも似た躍動的な主題が中心になるが、こちらは豪快で激しい。最後の大クライマックスに第1楽章第1主題を再現させ締め括るのは、ブルックナーが好んだ手法である。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット3、
 トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、弦楽5部

オーストリア最大の作曲家のひとり。リンツ近郊のアンスフェルデンに生まれた。ザンクトフローリアン、リンツ、ウィーンで音楽教師やオルガニストを務めた。オルガン奏者としての感覚を生かした壮大な交響曲の数々は特に有名で、音楽史に重要な位置を築いたが、極めて個性的な作風だったため、広く認められるまでかなりの年月を要した。今日では多くの熱烈な愛好者をもち、史上屈指の交響曲作家としての名声をほしいままにしている。